

「騙り部」としての石河幹明―再度石河明子氏に答える

平山
洋

【研究ノート】

「騙り部」としての石河幹明―再度石河明子氏に答える

平山 洋

はじめに

- 1、作者が『祖父幹明』の執筆を思い立つまで
- 2、「第一部 幹明の経歴と『福沢諭吉の真実』における疑問点」への応答
- 3、「第二部『水戸っぼの頑固』出版までの経緯とその後」への応答
- 4、別冊「平山洋氏の論文「石河幹明は福沢諭吉を『騙った』か―石河明子氏に答える」に対する訂正と疑問」への応答
- 5、「騙り部」とはどういうことか
おわりに

はじめに

本論考は人格批判を目的とするものではない。真実の探求を目的としている。

勤務校の図書館から次のような電子メールが届いたのは令和五年（2023）一月一五日の午後四時過ぎのことだった。

お世話になっております。附属図書館の〇〇です。本日、石河明子様より、以下の書籍のご寄贈がありました。それぞ

れ2冊ずつ、付録冊子も添付されております。

1 『祖父幹明と福澤諭吉、水戸っぼの頑固―未亡人、里からの聞き書き』

2 『祖父幹明と福澤諭吉―「水戸っぼの頑固」のその後』

寄贈者より、各1冊を平山先生にお渡しするよう、ご依頼があります。どのような形でお渡しすればよいのかご教示いただけますと幸いです。なお、送られてきた書籍に添付されていた鑑文をご参考まで添付いたします。ご多用のところ恐れ入りますが、よろしくお願いいたします。(一部表現替え)

文面の通り書籍の寄贈は図書館に宛ててであって私個人に対してではないものの、石河明子氏(以下作者)は図書館に私への著書各一冊の分与を依頼しているようである。電子メールに添付されていた鑑文もまた図書館宛てであるため本来なら閲覧は許されないとはいえ、参考までということと差しさわりのない範囲で要約するならば、拙論考「石河幹明は福澤諭吉を「騙った」か―石河明子氏に答える」(本誌第一八巻第一号・二〇一九年九月、以下前論考)において「絶版で入手困難」とされている前記1(以下『幹明伝』)と、改めて経歴などの再調査と事実の確認をした上で書き直した前記2(以下『祖父幹明』)を図書館と私に贈りたい、とのことである。学内便によりその書籍一冊を拝受したので、作者にはここで改めて謝意を表したい(註1)。そこで本論考の目的は新著『祖父幹明』の書中で拙著『福沢諭吉の真実』(文春新書・二〇〇四年八月、以下『真実』)に対して呈された疑問点に応答することで、「騙り部」とは何を意味するかを明らかにすることである。

1、作者が『祖父幹明』の執筆を思い立つまで

(1) 『祖父幹明』の書誌と目次

私が平成三〇年(2018)九月刊行の旧著『幹明伝』の存在に気づいたのが翌年四月のことだったことは前論考に書いた。私家版ということもあり図書館経由で貸借して読み、前論考を書き上げたのが六月、発表は九月となっている。紀要のコンテンツはすぐに大学のリポジトリと私のホームページ上で公開されたので、誰でもすぐに読めるようになった。作者が前論考に気づいたのはそれからおよそ一年後の令和二年(2020)秋頃であった模様である。本論考で取り上げる新著『祖父幹明』の刊行が令和五年(2023)一〇月であるから、その間約三年の時間が流れているわけである。そこでまず『祖父幹明』の書誌を紹介する。

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

タイトル…『祖父幹明と福澤諭吉—「水戸っぼの頑固」のその後』、著者…石河明子（一九四九年）、出版社…銀の鈴社（神奈川県鎌倉市佐助一・一〇・一二）、出版年月日…二〇一三年一月一日、大きさ・容量等…全九五頁／二〇cm＋付録冊子二四頁、付録冊子…「平山洋氏の論文「石河幹明は福澤諭吉を『騙った』か—石河明子氏に答える」に対する訂正と疑問」、価格…二〇〇〇円＋税

そしてその目次は以下の通りである。

はじめに／第一部 幹明の経歴と『福沢諭吉の真実』における疑問点／1時事新報入社以前の幹明／2時事新報入社前後の幹明の人間関係／3時事新報記者としての幹明／4幹明と水戸の繋がり／5福澤諭吉代筆から諭吉の死まで／6時事新報主筆／7交詢社常議員としての幹明／8時事新報退社／9『福澤諭吉傳』執筆依頼と関東大震災／10『続福澤全集』編集／11時事新報廃刊 隠居から死まで／12幹明の周辺の資料について／第二部『水戸っぼの頑固』出版までの経緯とその後／おわりに／参考資料／追加参考文献／『水戸っぼの頑固』正誤表

目次からも窺われるように新著『祖父幹明』の目論見は旧著『幹明伝』に続いて『真実』に反論するところにあるわけだが、旧著と異なる点は私の前論考での指摘を受けて、誤りを訂正しつつ幹明の伝記をより精密にするところにある。

(2) 『祖父幹明』執筆の意図

新著の「はじめに」で作者は執筆の意図を次のように述べている。

『水戸っぼの頑固』（すなわち『幹明伝』・平山）も、始めは、東京大空襲ですべてを失った未亡人里が、「覚えておいておくれ」と母に語った、昔の話を残しておくだけの企画でした。

しかし残された僅かな遺品の整理後、平山氏の著書『福沢諭吉の真実』（文春新書 平成十六年発行）を読み、幹明について、犯人あての推理小説のような、たいそう偏見に満ちた書き方をしている事と、その人物像が本人を知る世代が伝えるものとはまったく異なっている事、および幹明の経歴がわからないと書かれている事に疑問を持ちましたので、一般人の手の届く範囲で調査し、「こんなに簡単に調べられる事を、なぜ調べないのですか」という意味を込めて、個人史としてまとめたのです。

学説などとは関係なく、一般人として、単純な疑問を呈したのです。（八頁）

薄弱な根拠に基づいて石河幹明を悪人に仕立て上げ、本来福澤諭吉が負うべき責任を彼に擦り付けた、という『真実』への批判は刊行当初からあった。新書は紙数に制限があるため最初に書いた原型のうち論証の部分を大幅に割愛したためそうした批判を受けたわけだが、その後原型で削除された部分は『アジア独立論者福沢諭吉』（ミネルヴァ書房・二〇一二年九月、以下『アジア独立論者』）に復元してある。それを読めば私も初めから幹明を疑っていたわけではないことが分かるとはいえ、学術本はなかなか読まれないのが実情である。

ともあれ、幹明の経歴に関する調査不十分が『真実』に抱いている作者の不満の大きな部分を占めていることが明らかになった。以下では『祖父幹明』の構成に沿って『真実』への疑問に答えることにする。

2、「第一部 幹明の経歴と『福沢諭吉の真実』における疑問点」への応答

新著『祖父幹明』の第一部は一二の章に分けられている。以下で各章毎に作者の疑問に答えたい。

(1) 「時事新報入社以前の幹明」について

この章で作者は『真実』における水戸時代の幹明についての調査が不十分であるとしている。すなわち、「水戸市立図書館、博物館、茨城県立歴史館、茨城新聞社などネット環境も整っており、どれかに連絡ひとつすれば、石河の系譜と水戸時代の幹明のことは簡単にわかる」（二三頁）というのであるが、『真実』の原型を書いていた平成一三年（2001）から一五年にかけてのインターネットは未だ開発途上で、十分な実用性を備えていなかったと記憶する。

そこで調査を試みたところ、水戸市立図書館・水戸市立博物館・茨城県立歴史館・茨城新聞社のネット環境が整ったのは凡そ平成一五年（2003）頃で、『真実』の原型を執筆していた時期にインターネットを用いて水戸時代の幹明について調べるのは不可能であったことが確かめられた。現在でこそ調査は可能となっているが、実際のところ検索の結果は芳しくないのが実情である。郷土史関連の書籍について充実しているかにも思われる市立図書館にしてからが、「石河幹明」での検索結果は石河明子（作者）の二著と明治文学全集第九一巻の合計三冊のみである。

今世紀初頭のインターネットは実用に耐えなかったとして、それでは通常の調査方法によれば追究は可能だったのであろうか。

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

当時勤務校の図書館に配架されている目録を駆使して時事新報社に入る前の石河に言及している書籍を探し回ったものだが、見つけられたのは高橋義雄の『箒のあと』（秋豊園・一九三三年）だけだった。新著『祖父幹明』において、作者は私が坂田曉風著の『城東歴史散歩』（茨城新聞社出版局・二〇〇一年九月）と『福澤諭吉と水戸の門下生』（茨城新聞社出版局・二〇一六年七月）を見ていないことを批判するが、『真実』刊行後に出された後者を参考にすることはできないのはもとより、そこに幹明の情報が含まれているかなど予見しようもない前者を刊行直後に参照せよとは無理な注文である。

私自身『真実』執筆当時のことなどかなり忘れてしまっていたのだが、改めて調べなおして、「この伝記作家の伝記となると皆目見当がつかない」（『真実』一四七頁）と書いたのは、まさに真実の言葉であったことが確認できた。私はべつに石河の身辺についての調査を故意に怠ったことにより、後の論を自己に都合よく展開させようとしたわけではなかったのである。

(2) 「時事新報入社前後の幹明の人間関係」について

この章の内容に関して作者は私を批判していない。基本的に『真実』の説明は簡略に過ぎるというだけのこと、記述自体には間違いが無いせいであろう。内容的には旧著『幹明伝』の第2章「生い立ちなど」と重複しているものの、水戸から慶應義塾に推薦された石河幹明（一八五九年生）・井坂直幹（六〇年生）・高橋義雄（六一年生）・渡辺治（六四年生）ら四名と福澤の弟子で茨城師範学校の校長だった推薦者松木直己（五四年生）との関係がより詳しく記述されている。

(3) 「時事新報記者としての幹明」について

本章は旧著『幹明伝』の第3章「時事新報記者時代」の記述を前論考への反論も込めて増補している。おそらく『真実』がこの時期の幹明について他の記者とのライバル関係や、その中でも福澤から低い評価しか得られなかった事実を強調していることから、『幹明伝』では彼が福澤からいかに気に入られ、厚遇されたかについてのエピソードが盛り込まれ、そして新著『祖父幹明』では前論考で私が強調した明治二年（1888）一〇月のクーデタ騒動の作者なりの評価が加筆されている。

旧著『幹明伝』において、幹明が福澤から信頼され愛されていたというエピソードを紹介した後、作者は次のように述べている。

諭吉は幹明の事を軽んじていたという研究者もおられます。

理由は、諭吉が幹明を褒めたという記録が残っていないからです。

しかし、逆に、諭吉が幹明の事を悪く言ったという記録も無く、若い頃の文章についてはつまらぬとか、手入りを要すとか、散々酷評されていますが、諭吉が幹明自身の人格を批判したものは、明治二十一年、二十九歳の時の辞表騒ぎの手紙だけ。(四五頁)

この『幹明伝』の記述から検討したいが、高橋への高評価とクーデタ騒動が記されている明治二〇年から翌々年にかけての上川宛書簡は第二次世界大戦後に発見されたもので、幹明が編纂した『続全集』(岩波書店・一九三三、三四年)には収録されていない。すなわち現行版全集にそれらが初収録された一九六〇年代になるまで、大正版『全集』(国民図書・一九二五、二六年)と昭和版『続全集』のどこにも福澤による幹明への批判は存在しなかったのである。この事実が何を示すかは明らかであろう。厳しい指導で鳴らした福澤が文章の拙な幹明を叱らなかつたはずはない。要するに幹明は自分を低く評価したり批判したりした福澤の手紙やメモを手元に保存しておかなかつたという、ただそれだけのことである。

このように福澤が幹明の事を悪く言った記録が無いことの説明は簡単につくわけだが、福澤が幹明を褒めたという記録も残っていないというよりはより深刻である。良いものは良い、とはっきり言いましたメモにも残していた福澤が幹明起筆社説についてもそう感じたなら、躊躇なく褒めた記録を残し、幹明もそれを大事にとっておいたに違いない。逆に褒められた記録が無いのはその事実が実際に無かつたからで、このことは幹明には文才がないと福澤が判断していたことを意味しているのである。

ここまでは旧著『幹明伝』に関することからだが新著『祖父幹明』でも作者は次のように述べている。

諭吉は退社した高橋氏の才を惜しみ、褒め上げて記事を依頼したりしていますが、いまだ教育中の未熟な幹明を下手に褒めちぎったり、主筆に推したりはしないでしよう。

また、一介の記者が主筆を目指すのは当然ですが、平山氏の言う「主筆を狙う」という積極的な上昇志向を指す行動を幹明は取っているでしょうか。(二一八頁)

この引用の後段について先にコメントするなら、もちろん幹明は直接行動を取っている。それは作者が旧著『幹明伝』で全文を引用している明治二十一年一〇月二二日付中上川宛書簡中の一節、「渡辺も石川も文章の拙なる者にて、此者等が不平などと云はずして文の脩業致し、ほんとうに社説が出来る様になれば、老生は快く之に譲渡す積なれども、自分を顧みずしてグツグツとは、自省之明なきものなり」という部分の「譲渡す」という表現がそれで、これは自分たちのいずれかを主筆とせよ、という意

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

味なのである。

この時の幹明の年齢二九歳は、当時の感覚では全然若くはなく、二カ月前の八月に時事新報社の南百メートルほどの所に引越してきたばかりの民友社の徳富蘇峰は二六歳、すでに雑誌『国民之友』の創刊二年目にして論壇の中央に躍り出ている。彼は「天保の老人明治の青年」とあからさまに福澤をライバル視していて、『時事新報』を主要な仮想敵とする『国民新聞』（明治二三年創刊）の発行準備を進めていた。また、前論考にも書いたように、創刊時の主筆である中上川は就任時二七歳で、クーデタ時の幹明よりも二歳若かった。

先の引用の前段に登場する留学中の高橋はその時まさに二七歳、前年七月に退社していたのだが、同じ明治二〇年の四月に一足早く主筆の座を下りて山陽鉄道の経営に携わっていた神戸の中上川に、福澤は時事新報社の内情を知らせる手紙を書いている。翌明治二一年早春、すなわちクーデタ騒動の八カ月前の書簡には留学先で資金難に陥った高橋への援助を申し出た旨記されている。

高橋が再び新報社へ帰り永く社に居て勉強する気があるならば、本年七月より来年の六月まで一ヶ年福澤より金を給して文学を学ばしむべし、来年帰国までも毎便社説を認て送り越すべし、此義同意ならば千円計りの金を与ふべし云々。（明治二一年二月二十七日付）

すなわち福澤はニューヨークに留学中の高橋を時事新報特派員として再任用し、さらに帰国後は新聞社に復帰をさせようと画策していたのである。その後高橋は「米國雜説」八回（同年八月）、「国会準備」二回（同年一月）を送って寄こしている。尤も同年八月二十七日付の中上川宛書簡に次のようにあるところを見ると、このとき高橋は福澤の帰国後復帰の申し出をやりわりと断ったように思われる。

渡辺は先ず執筆に宜しけれども、文章に妙なくせありて正刪を要する事多し。石河はあまりつまらず、先づ翻訳位のものなり。老生の所見にて高橋が一番役に立候様に覚候得共、是れは商売がすきと申せば致し方なし。新聞社に居て文の拙なるは両国の角力に力のなきが如し。何は扱置き困り申候。

クーデタ騒動二カ月前のこの書簡にもあるように、高橋への評価は、渡辺・石河に比べてははっきりと高い。作者（明子）は幹明が高橋に嫉妬心など抱かなかつた、と書くのであるが、ここまで歴然たる評価の差をつけられながら、人として平静でいられるものだろうか。福澤当人は口に出さぬとも態度には現れるはずなのである。

また二月二十七日付書簡にあるように、帰国後の新聞社復帰を条件に千円（現在の二千万円程度）の援助を約束したからにはそ

のことを経理に相談したのは疑いがなく、その情報は幹明の耳にも届いたに違いない。しかもそれだけ出そうというのだから高橋の復帰が主筆就任含みであることも容易に想像ができた。

復帰について一旦は福澤をがっかりさせた高橋ではあったが、ロンドンに移っていた翌明治二十二年五月にも署名入りで「仏蘭西人」の連載社説を送ってきているので、部外執筆者としての役割は果たしていることが分かる。さらに中上川宛書簡「菊池(武徳)は中々宜敷、高橋の次ぎ、渡辺石河の右に出る者なり」(明治二十二年六月二日)、また「高橋義雄氏帰国、時事に執筆可致と申に付、拙者も少しらくに可相成存候」(八月一日)と続く。クーデタ騒動の一〇カ月後にいたっても幹明と高橋の評価の差は全然縮まっていない。

もちろんだからといって幹明が高橋に嫉妬心を抱いていたという明確な証拠などはない。表面的にはその後も友人として交流していたし、水戸家の事業として継続されていた『大日本史』の完成についても協力してことにあたっている。とはいえそれはあくまで外面のこと、幹明が高橋起筆社説を福澤全集から排除した、という確かな証拠があるのである。それは福澤名義で出版された『修業立志編』(明治二十二年)所収の「英国学風」を全集非収録としていることで、この社説は明治二十二年(1889)九月二八日と一〇月二日に掲載後、翌明治二十三年一二月刊行の高橋義雄著『英国風俗鏡』に収められている。

それが八年後には福澤名義の『修業立志編』に収録されているというのは、要するに福澤が在英国の高橋に主題を指示して起筆返送させ、加筆の上紙面に掲載したものを、当初福澤は高橋起筆ということと彼の著作に入れることを許し、後には自分の演説論説集に収録しなおすことにした、ということであろう。幹明は『続全集』の編纂にあたりわざわざこの「英国学風」を非収録としている。そればかりではない。高橋が『箒のあと』で福澤から激賞されたと明かしている自身起筆の社説はいずれも非収録とされているのである。

幹明が『続全集』のために社説を選んでいたのは紙面に掲載されてから凡そ四〇年後のことである。それだけの時間が経過しているながら幹明は高橋起筆社説を排除するのに躍起になっていたわけである。作者(明子)は、私(平山)によって「文才がないのに高橋氏に嫉妬した石河」というレッテルをはられ、この根拠のない土台の上に、同様な「憶測」が積み上げられていきます」(二三頁)と書いているが、以上の経過や排除の事実を知りながらなおもそう主張し続けるのであろうか。

(4) 「幹明と水戸との繋がり」について

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

本章に相当する部分は『幹明伝』にはない。ここでは松木直己と幹明との関係が前作より詳しく説明されている。『真実』と関わるところは少ないのであるが、「『福澤諭吉傳』」にこの時期の同僚であった菊池武徳氏の名がない事を指摘されますが菊池氏も三年後には退社、政治家への道を選んだ人物です（三四頁）という一節については触れないわけにはいかない。この部分は『真実』の、

このように渡辺が去った八九年から九一年まで『時事新報』社説欄を担っていたのは石河と菊池だったのだが、不自然なことに『福澤諭吉伝』には菊池のことが一言も触れられていない。クーデタ騒動に菊池を引張り込んだ負い目があるからであろうか。伝記が出版された時、自分が登場していないことを知った菊池がよく抗議しなかったものだ。（五四頁）

という記述を受けている。作者（明子）は、菊池が新聞社を腰かけのようにして去って行ったがゆえに幹明は彼を軽く扱っていると言うのであるが、新たに菊池の業績を調べたところ、どうもそうではないような気がしてきた。はっきりした証拠はないものの、政治家になった菊池と『時事新報』主筆となった幹明とは実は昵懇だったのではなからうか。

幹明と菊池について『真実』執筆時の私は、時事新報社を去ってからの両者は疎遠になってしまったのではないかと何となく思い込んでいたのだが、菊池はその後もずっと交詢社員だったので、その常議員（役員）だった幹明と交流を絶やしたことはなかったのである。しかも私が調べた限りでは両者の考え方はよく似ていて、袂を分かつような理由は見当たらない。大正元年（1912）の第一次護憲運動当時の菊池は政友会の中堅代議士、幹明は時事の主筆として世論をリードしていた。この二人にそれぞれがもつ力の貸し借りがあったと見るのが妥当とも思われる。

そうなると『福澤諭吉伝』で菊池が言及されていない事実や、また『続全集』で幹明が自ら起筆した社説を優先して採録している事実を知っていたのに何も言わなかった理由についても、あらかじめ両者に何らかの示し合わせがあったのかもしれないのである。

(5) 「福澤諭吉代筆から諭吉の死まで」について

旧著『幹明伝』において作者は「平山が脳卒中の発作後の福澤が認知症のようになった理解している」と誤解していたのだが、前論考での私の説明によりその思い違いは解消されたようだ。失語症と認知症は異なる。福澤の内面は正常であったから理論的には社説の立案も可能なわけだが、私は『真実』の中で、「それなら立案メモが残っているはずで、それが発見できていないの

はおかしい」と主張し、前論考でも再度表明したのである。新著『祖父幹明』の本章はさらにそうした前論考への応答となっている。

意思疎通するには、患者のボディ・ランゲージを読み取って「こう言いたいのですか」と意味を問い、患者が是非か、○か×かを答える事で会話が成立していきます。耳で聞く内容を聞き取る事は出来るのです。

幹明は「再三諭吉に朗読し、訂正を受け、大体意に添わざる」事を確認したと言っておりますし、長年にわたって共に働いてきた幹明が、諭吉の意図を完全に見誤るといってもおかしいかと思えます。(二九頁)

私は脳卒中の後遺症で失語症になった実父を介護した経験があるため知っているのだが、引用前段の記述は概ね正しい。ただ失語症といっても完全に声が出せないわけではなく、ごく短い言葉なら発することができる。また、まとまった文章は書けなくても単語をメモすることはできる。要するに言葉の繋がりを表現できなくなるということで、伝えたいメッセージ全体を表現するにはボディ・ランゲージが必須となるわけである。

それはそうとはいえ、引用後段の記述には疑問が残る。カギカッコ内の出典が示されていないのを遺憾とするが、どうやら明治三十三年(1900)一月二六日付の紙面に掲載された「福澤先生の演説」の幹明による前書きを典拠としているようである。それならこの前書きの記述自体に疑義があることは、すでに『真実』の段階で私は指摘していた。

現行版『全集』の「時事新報論集」には、大病後のものとして「福澤先生の演説」(一九〇〇・一一・二六)なるものが収められているが、その前書きに、以下の演説はビヤズリー氏の歓迎会の席上で令息の一大郎氏が代読したものである、執筆自体は石河が行ったが、「再三先生の前に朗読し、其指摘せらるゝまゝに訂正を加へしものなれば、大体の上に於て先生の意に違はざるは記者の保証する所」(⑩六四八頁)であると注記されている。

実際の執筆者である石河が、出来上がった演説草稿を福澤の前で読み上げたのは事実であろう。しかし福澤がその字句に細かく注文をつけたというのはおそらく本当ではない。なぜならこの演説で触れられている福澤の思い出話に、本人なら決して間違えるはずのない事実誤認があるからである。それは、幕府の翻訳方に勤めるようになってから咸臨丸に乗り組んでアメリカに行った、とのくだりで、真実は、『福翁自伝』にもあるように、咸臨丸での働きぶりが認められて幕府に出仕するようになったのである。福澤の指摘のままに訂正したのだとしたら、このような基本的な間違いが残されているはずはないであろう。これもまた、福澤があたかも健在であるかのように振る舞った周辺芝居の一つであったのである。(一四〇、一四一頁)

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

福澤諭吉名で発表されたこの「福澤先生の演説」はすでに大正版『全集』に収録されている。前書きを読まなければ福澤本人が演説したと勘違いされてしまうとはいえ、きちんと代筆代読と注記されているので形式上の問題はないといえる。

問題は昭和版『続全集』でさらに増補された病後七七編のほうで、石河筆記との注記はあるものの福澤立案の証拠などどこにも示されていない。脳卒中の後遺症から奇跡的に立ち直った福澤立案の社説ならその旨を示した前書きくらいありそうなものだが、紙面に福澤作の表示はなく、非収録になっている社説と差はないのである。そして福澤本人によるメモ類の残存はなく、福澤が社説を立案したという同時期の証言も発見されていない。

発作に襲われたとき六三歳になっていた福澤はすでに日々の社説からは遠ざかっていたから、その事態により新聞社が発行に窮するということはなかった。明治二十九年(1896)の捨次郎社長の就任以来、紙面の論調は編集会議で決定され、社説は幹明・北川礼弼・堀江掃一ら三名の社説記者の輪番によりなされていたのである。そうだとすると次のような疑念が生じるのは必然である。すなわち、福澤の肉体的回復にかこつけて、幹明は自分で書いた福澤本人とは無関係の社説を『続全集』に収録したのではないか、という疑いである。

(6) 「時事新報主筆」について

幹明の時事新報主筆就任は明治三二年(1899)八月のことであった。任命したのは捨次郎社長であって、そこに諭吉の意向が働いていたのかどうかは明らかではない。その時幹明は四〇歳、福澤に社説を譲り渡せと迫ってから一年が経過していた。これは『真実』の刊行以来何度も書いてのことだが、もし福澤にいずれは幹明を主筆にするという腹案があったなら、どこかにその意向を示唆する資料が残っていなければおかしい。福澤にその意向があったなら幹明にその旨を伝える文書を渡しただろう。ところが書簡等に幹明の社説を褒めたものさえないことは作者(明子)も認めているところである。『福翁自伝』では明治三〇年(1897)秋頃の内情として三名の社説記者はまったく並列的に記述されていて、幹明の優遇などどこからも窺われない。

(7) 「交詢社常議員としての幹明」について

本章に相当する部分は旧著『幹明伝』にはない。幹明が交詢社の運営に携わる常議員の長だったことは旧著にもあったが、新

著『祖父幹明』ではその点をより掘り下げている。作者は次のように述べている。

明治三十一年に交詢社常議員となった幹明の名は『慶應義塾百年史』『交詢社百年史』に何度も登場します。

幹明は諭吉の三大事業すべてにかかわっていますが、時事新報は社史が残っていませんので、主筆時代の公的な記録に幹明の名が残るのは、『慶應義塾百年史』『交詢社百年史』および交詢社が発行する『日本紳士録』となります。

しかし平山氏は、この三冊を資料として挙げていないのです。(四八頁)

本文が新書版二三〇頁、原稿用紙にして四百枚程度の『真実』に何でも盛り込めというのも無茶な話だが、そこに書かれている情報が本当に必須なのかどうか、実際にそれらの本文を確認してみよう。

まず『慶應義塾百年史』については個人で所有していて、『真実』執筆時にも参照した記憶があるのだが、どうやら「主要参考文献一覧」から漏れてしまったらしい。①「福澤の伝記」、②「福澤の研究書」、③「福澤に関係した書物」の三区分のうち③に属すると考えられるが、優先順位の点から落としたのであろう。さっそく幹明と交詢社の関係について調べてみたが、幹明の名が挙げられている凡そ四〇カ所はその大部分が時事新報社または福澤伝や全集編纂との関りで触れられていて、交詢社との関係をうかがわせる記述はほとんどなかった。『慶應義塾百年史』を見ていながら幹明と交詢社との関係に気づかなくても遺漏とは言えないと思う。

次いで『交詢社百年史』については、大学図書館の所蔵状況を調べると七一館が所有していると判明した。勤務校は所蔵していない。ただ、『慶應義塾百年史』を目を皿のようにして探さなければ幹明と交詢社の関係に行き着かないというのに、さらにこの書籍を参照せよと言われても、もともと『交詢社百年史』に幹明に関する記述があることなど知らないのだから、見つけ出せないのは当然なのではなからうか。

最後に『日本紳士録』については、勤務校には昭和三十一年(1956)の四九版と平成一十七年(2005)の七九版が収蔵されているが、いずれも幹明没後の版なので参考にはならない。勤務校に隣接している静岡県立中央図書館はまったく所蔵していない。幹明存命時の版を探さなければ彼の経歴を知ることができないわけで、そうした古い版を探すのは至難の業である。現在では国立国会図書館デジタルコレクション(以下国会DC)をネットで検索が可能なのでそこでの記述を調べたところ、明治二十二年(1889)の初版から昭和一十七年(1942)の四六版までの二六冊に幹明の名前が見える。

そのうち大正元年(1912)の一七版までは「時事新報社員」、次に登場する大正一十四年(1925)の二九版では「時事新報相談役兼名誉主筆」、昭和二年(1927)の三二版から七年(1932)の三六版までは「時事新報名誉主筆」、八年の三七版では、「時事

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

新報名誉主筆交詢社常議員副長」、一一年の四〇版で「時事新報社株千代田生命保険互各取締交詢社常議員副長」、一二年の四一版、一三年の四二版で「千代田生命取締」、一五年の四四版で「交詢社常議員長」、一六年の四五版で「交詢社常議員長慶應義塾評議員」、そうして一七年の四六版で「交詢社常議員」となっている。

ちなみに交詢社常議員とは理事長（一名・通常慶應義塾長）・理事（七名）の次の役員で、昭和一七年には総数六一名となっている。最後の年に常議員長から常議員となっているのは、常議員長の職が廃止されたためのもので、幹明は最後まで常議員の筆頭ではあったのである。

(8) 「時事新報退社」について

本章と次章は旧著『幹明伝』の第5章「時事新報退社と関東大震災」の前半に対応している。私の見解に触れている部分はない。ただ、幹明が退社するに至る時事新報社内内訌は、巡り巡って後年の幹明評価、ひいては福澤評価にまで影響を与えているので、ここでは大正九年（1920）に始まる時事新報社の内紛について述べることにする。

大正時代に入ってから朝日・日日といった全国紙の猛追を受けて、これでは先細りになるという危機感によってからか、大正一一年（1922）四月に捨次郎社長は自らの女婿を要職に就けるべく画策した。一方編集部内部の主に慶應出身者がそれに反対したことで内紛が勃発したのである。後に述べるような経緯で結局は慶應閥の負けと決し、首謀者たちに連座することになった幹明も退職することになったのである。『祖父幹明』にはこうある。

幹明は板倉卓造（註2）、成瀬義春（註3）、伊藤正徳（註4）氏の雇用に反対する社長捨次郎氏に対し、三名を解雇するならば自分も辞める、と言い切り、言葉どおりに共に辞めてしまいます。十六名の同時退社という大変な事になってしまいました。

板倉卓造氏何名もがその後復帰しますが、幹明は、「一度退社したからには戻るつもりはない、僕は隠居する。」と言い切つて、きっぱりと新聞記者としての生命を終えてしまいます。（五六頁）

ただ、この記述は先の『日本紳士録』を見てみてもやや不正確ということが分かる。実際には三年後の大正一四年（1925）には時事新報の相談役兼名誉主筆に返り咲いているからである。

このいわゆる時事新報社のお家騒動について、作者の記述は旧作『幹明伝』でも新作『祖父幹明』でも幹明自身の手記と板倉

卓造の回想を用いているため退社した人々寄りとなっている。捨次郎社長が女婿を無理やり要職に就けようとしたのが発端のことだが、どうもそればかりではないようだ。この内紛についての同時的記事はないものかと調べてみたところ、雑誌『日本及日本人』大正一三年一〇月一五日号の宋公明（安岡秀夫？）による「資本禍に悩乱する時事新報―福澤翁の偉業滅び残骸徒らに醜し―」という記事を発見した。その内容が正しいという保証はないものの、より詳細な説明があるので参考までに紹介したい。論説の最初の方で宋は時事新報社のありかたが福澤の初志から離れてしまったことを次のようにまとめている。

翁の主張は何者と雖も曲ぐる能はず、実に堂々たる操觚者の矜持であり、明治日本の文化史上、燦然と輝く明星であつた。然るに翁の歿後は、翁の肉体的終焉と共に、時事新報の主張は自殺的に脆くも崩壊しつくしたのである。なるほど同社の宣伝部員の称するが如く、その組織に於て、或は体容に於て正に堂々たる大新聞に伍し敢て恥ぢざるの地歩を確守し、大正九年五月には資本金五百万円の株式会社となり、時運に添うて劣らざるの営利的施設全うしたのであるが、その反面には主観的自殺と相次ぐ内訌に依つて、混乱名状し難く遂に二流新聞に低下し終ると共に、営利的にも亦窮乏損失を告げ、真に命旦夕に迫れるを僅に關係資本家の出資によりて、氣息奄々たるに過ぎざる事情とはなつたのである。（四〇頁）

実際に休刊となる一年前、関東大震災の翌年である大正一三年秋の段階で、『時事新報』はずでにその状態に陥っていたのであった。なぜこのように凋落してしまったのか。記事によれば大正九年（1920）五月の合資会社から株式会社への組織変更がそもそもの発端だったという。それまでの個人商店のような時事新報社の社長であり社主でもある福澤捨次郎の権限は絶大で、たとえ主筆であるにもせよ使用人にすぎない石河幹明が経営に口を挟むことはできなかった。ところが合資会社では企業としての規模拡大には不都合なのは明らかで、そこで株式会社へと変革されることになったのだが、それは同時に捨次郎の発言力の低下を意味していた。

記事には株主三六名の名前が列挙してある。その中には捨次郎・幹明の他、後に幹明が守ろうとした板倉卓造と伊藤正徳の名前もある。資本金五百万円のうち三百万円は福澤家や従業員が受け持ったのだが、残りの二百万円は公募となって外部の実業家が株を購入した。武藤山治（註5）・池田成彬（註6）・藤原銀次郎（註7）・和田豊治（註8）らがそうした人々であるが、彼らは各々自分の理想とする新聞観をもっていたのである。

かくして内紛の種は撒かれたのであるが、第一次世界大戦後の全国紙へといかにして変容させるかについて、派閥は大きく二つに分かれた。一つは捨次郎社長による米国大衆紙を目標とする改革派、もう一つは幹明ら古参の記者たちによる高級論説紙としての品格を維持しようとする保守派である。諭吉の息子が『時事新報』の伝統を破ろうとするというのも奇妙な気がするが、

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

英国の『タイムズ』紙を範としていた諭吉に対してM I Tの卒業生である捨次郎は米国の新聞に馴染んでいた。マスコミはエンターテイメントであると信じていた捨次郎は紙面を刷新しつつ、諭吉没後の一〇年間は実際に発行部数を押し上げていたのである。

全国的大衆紙とするには資本が不足している、そのための株式会社化だったのだが、それは社員株主の発言力の増大をも意味していた。そうして対立が顕在化するのであるが、記事には次のようにある。

由来、福澤社長は社内に於ける、主筆石河幹明の大久保彦左式態度を心より憎悪し、事毎に福翁を担ぎ出す事を以て苦々しき限りであると為し、其の結果は大阪時事を創刊し、或は自己腹心の社員を重用する等、各種の方面に反石河熱を濃厚ならしめて来たのであるが、大阪時事の損失に次ぐに損失を以てするの不振状態に反して、励精一刻も忽にせず、且つは福翁の玄関番より振出して、代作の光栄を誇る石河の勢力は牢として抜く可らず、而も酒も煙草も口にせざる聖僧生活をそのまゝに行く石河の人格に対比し、流連荒亡の「捨さん」の艶名高き蕩児の焦慮は石河の堅城を抜く可くもあらず、悶々の情あると共に社長派と石河系の反目の端を開き、之を如実ならしめたのであった。

この間隙に乗じ、社外の株主中、新聞野心を有する株主に迎合し、之が甘心を購はんが為めには、幫間末社の如き態度も敢て辞せず、世情に迂なる石河を表面の人物に押立て、自家の低劣なる野望を満足せんとする一派が存在したのである。之れ成瀬義春（当時の経済部長）を中心とし、伊藤正徳を之に配し、純慶應閥の社員を以て体系とせる一派であり、社外に於ては池田成彬、武藤山治、藤原銀次郎等の資本家が、この運動を助成せしめ、突如として編集局幹部の大更迭を敢行した。即ち大正十一年四月である。職制を変更し、主筆石河幹明の下に副主筆板倉卓造（論説部長）、編集部長明石徳一郎を大阪時事に左遷せしめ、之に代るに成瀬義春を以てし、政治、経済両部を併合して、政経部とし部長に伊藤正徳、政治主任に後藤武男、経済主任に鈴木憲久を任命し、同時に政治部長桜井轍三を理事の閑職に追放し、社会部長矢部謙次郎を罷免して、政治部長森田耕吉を任用し、併せて官僚的社規を設け首尾よく社長弾劾と、成瀬、伊藤の締盟陰謀を成就した。（二〇一頁）つまり板倉・成瀬・伊藤の解任事件の前に彼らによるクーデタが勃発していて、しかも事変は成功して一時は石河派の勝利となったのだが、さらにどんでん返しが待っていたのである。記事は続けてこの急な組織改編に編集局員が反対の声をあげたことを伝えている。

斯て伊藤、成瀬の連立内閣はその体容を整へて社員に臨むや、編集局裏に風雲頗る急なるものあり、成瀬脚下の経済部は勿論、桜井轍三の下に犬馬の勞を辞せざりし政治部員は、迎合主義の大久保某外二三を除き、全部結束して立ち、社会部も亦

矢部に傾倒せる幕下十数名之に馳せ参じ期せずして、編集局員七十余名は連判状を作製し、同時に日比谷松本楼に会し、成瀬内閣弾劾の大懇親会を開催したのである。(一〇二頁)

編集局員七〇名以上が動かないとなれば新聞発刊はおぼつかない。この組織改編は二週間で立ち行かなくなり、捨次郎社長はクーデタの首謀者である伊藤・成瀬・板倉の鹹首を發表、幹明は擁立されただけでということによって罷免はされないことになっていたが、幹明は捨次郎社長に自分の首を懸けて三名の地位保全を求めたのだった。三四年前のクーデタ騒動では論吉は石河の追放を断念して懐柔の道を選んだが、捨次郎はそうはしなかった。どうぞ、と言ったのである。

石河幹明らの狼狽は極度に達し、鎮撫に努力せるも亦効なく、遂に四月下旬、石河、成瀬、伊藤以下二十余名は連袂退社するを余儀なきに至り、成瀬内閣の蜃気楼は脆くも崩壊し、閥族弾劾派は凱歌を奏したのであった。(一〇二頁)

ここで閥族と呼ばれているのは慶應閥のことで、時事新報社が小さな新聞社であった頃から勤めていた出身者と、拡大後に採用された他学出身の人々との対立が背景にあった。両派のどちらが正しいかなどという価値判断はさておいて、ここで石河に連なる人脈が、後年石河を新聞人としての福澤の後継者として一種の神格化を行った人々であることに注意が向けられる。とくに板倉と成瀬は重要で、板倉は時事政治部長でありながら一貫して慶應義塾の教員であったし、経済部長だった成瀬もまた時事放逐を機に教員となっている。

(9) 『福澤論吉傳』執筆依頼と関東大震災』について

本章は旧著『幹明伝』の第5章「時事新報退社と関東大震災」の後半と第6章『福澤論吉傳』執筆」に相当している。時系列で並べるなら大正十一年(一九二二)四月に時事新報社を退社し、翌一二年六月に福澤伝の執筆依頼があり、同年九月一日に関東大震災が起き、同月中に図書館内に伝記編纂所が設置されたのであるから新著の配列のほうが分かりやすいようにも思われる。

作者によれば伝記執筆の依頼に際し慶應側で対応にあたったのは主に当時三六歳の少壮教授小泉信三(註9)であったという。この事実は未亡人里の回想に基づいていて、信憑性は高い。『慶應義塾百年史』など公的記録ではとくに小泉が担当したとは書かれていない。『福澤論吉傳』全四巻で小泉に触れた部分は序文等を含めて一カ所も存在しない(国会DCの全文検索による)。

この小泉以外にも表には出ていないが他にも『福澤論吉傳』の企画に熱心だったであろう人物は想定できて、それは板倉と成

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

瀨の両名である。小泉との関係からいえば成瀨は同期の上留学先の英国でも同室だったという親密な間柄だった。板倉と成瀨の名前が出てこないのは、時事追放劇の余韻も冷めやらぬうちにこの二人が伝記執筆の段取りをつけたとあっては、世間の哄笑を受けるかもしれないという配慮の上と思われる。

六月に幹明が義塾評議員会から依頼されたのはあくまで福澤伝の編纂であって、全集等の編纂については何も言われていない。実際大正版『全集』（大正一四、一五年）は国民図書刊行で、時事新報創刊一万五千号記念というのが名目である（追い出されたはずの時事新報社との関係が修復されたことの理由は後述する）。慶應から『全集』編纂さえ依頼されていないのだから、ましてや『続全集』の企画はその時点では影も形もなかった。

文学部生だった水戸出身で二四歳の富田正文（註10）が塾監局（事務局）の掲示板でアルバイト募集の掲示を見つけたのはその頃のこと、伝記編纂所で幹明の助手となったことが彼の人生を決定づけることになった。その後平成五年（1993）に九五歳で死去するまで、彼は幹明の熱心なそして最後の祖述者となる。

伝記編纂の事業が動き出した二カ月半後に関東大震災が起こったことはまったくの偶然である。ただこの大災害が一旦は追放された石河派が時事新報社に復帰するきっかけとなったのは皮肉なこと、人生何が起こるか分らないの典型例であった。新報社の被害はいえはまず銀座の本社屋が全焼してしまった。災害報道をしなければならぬままにその時に拠点を失ってしまったのは致命的で、ただでさえ劣勢になってきていた朝日・日日ら全国紙との差はますます広がる結果となった。

新報社は仮社屋をその発祥の地慶應三田に求めたが、そこでは一足早く追い出された幹明らが伝記編纂の準備を進めていた。両派は狭い構内で顔を突き合わせるようになったが、さぞや気まずい気分を味わったに違いない。時事新報社は四年後の昭和二年に皇居の堀端に地上五階の新社屋を建てることになる。

この状況は反慶應閣の編集部員にとっては相当にきつい状態だったはずで、そのせいなのだろうか、騒動からたった一年半しか経過していない震災の年の秋には追い出された人々の復帰が果たされている。その辺の事情を詳しく語っている資料は発見できていないが、察するに本社屋が焼かれて蓄積を失ったうえ震災後の一時期、報道機関としてもっとも必要とされていないながら新聞を発行できなかったことへの不甲斐なさや、敵地である三田構内の居づらさから、一人去り二人去りしていったため、人手不足が生じたためと推察する。幸か不幸か、追い出された古参の編集部員はすぐ近くにいたのである。

捨次郎社長は大正一五年（1926）四月まで社長に留まっていたが、それ以前から体調不良であったと伝えられている。もはやリーダーシップを発揮できる状況にはなく、復帰した板倉が実質的なトップとなったことで、石河と成瀨を除くほとんど全員

が元のさやに納まったのだった。大正一四年の『日本紳士録』二九版からもうかがわれるように、伝記編纂の中心にいた石河は相談役名譽主筆という半ば外部のポジションから板倉らによる言論を統御したものと思われる。

(10) 『続福澤全集』編集』について

旧著『幹明伝』では独立の章とはされていないかった『続全集』について、作者が新著『祖父幹明』でその編集に関してより重きを置いているのは、おそらく私の幹明批判の多くの部分はその「時事論集」編纂への疑念に割かれているからなのだろう。とはいえ本章冒頭で「幹明が諭吉を騙り、自らの社説を諭吉のものと偽って混ぜた」(六二頁)という表現は『真実』での私の見解に近いようにも見える。それを『続全集』編纂時のこととするならば、そうである。だいたい、「偽って」という部分を削除してしまえば、幹明自身が『続全集』の「付記」(第五卷七三七頁)で述べていることも同じになるのである。すなわち、

固より社説記者は私一人のみではなかつたが、私が筆に慣るるに従つて起稿を命ぜらるることが多くなり、二十四五年頃からは自から草せらる重要な説の外は主として私に起稿を命ぜられ、其晩年に及んでは殆ど全く私の起稿といつてもよいほどであった。勿論其間にも私自身の草案に成つたものも少なくなかつたが、先生は病後も私に筆記せしめられたものがある。(『真実』七五頁)

と、もちろん「起稿を命ぜ」られてという断りがついてのことであるが、現に『続全集』に収録された社説、すなわち現行版「時事新報論集」収録社説の多くは幹明の起筆によるものなのである。『真実』以来私は、福澤の指示によって書かれたとされる社説と福澤本人による社説との間の甚だしい懸隔を説明するためには、福澤の指示によらない幹明オリジナルの社説が『続全集』に収録されたという解釈以外は不可能である、と唱えてきたのである。

もとよりこのことを物的証拠によって証明することは困難である。創刊以来明治三四年(1901)二月三日までに掲載された社説の総数は約六千二百と考えられ、そのうち福澤本人の原稿が残っているものが百日分強、メモ等により関与が証明できるものがおよそ百日分弱である。さらに掲載後福澤名で刊行された署名著作が一五冊一六七日分ある。要するに多めに見積もったとしても福澤関与が証明できる社説は四百日分を超えることはなく、総数比では六パーセント程度である。残り九四パーセントの起筆者を決めるとすればそれは井田メソッドなどの文体・語彙判定に依るしかないのである。

ただ、幹明が福澤作と知っていたながら『続全集』に採録しなかつた社説があったことは証明が可能である。その点について私

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

は前論考で疑問を公開しておいたが、作者は「素人が口を出すことではない」（六二頁）と逃げてしまった。しかし私の疑念の拠り所は単純明快で、研究者であろうがなかるうが、意見の表明は簡単にできるていものにもすぎない。すなわち前論考の「おわりに」に書いたように、

『時事新報』社説欄に連載後福澤名で単行本化された著作は全部で一八タイトル一五冊刊行され、そのうち連載に先立って発表された原型社説が一・二タイトル発見できた。しかし石河によって『続全集』に収録されたのはそのうち「德育余論」一タイトルにすぎず、原型社説の大部分は全集未収録とされているのである（『福沢諭吉』とは誰か』第六章「福澤署名著作の原型について」参照）。石河が『続全集』編纂の過程で原紙に掲載された原型社説を見落とすなどは考えられず、彼はそれらを福澤作と知っているながら全集に収録しなかったのである。（『時事新報社主』四〇三頁）

と、幹明が『続全集』に福澤作と知っているながら故意に収録しなかった社説があり、さらに現在まで発見されている福澤直筆原稿残存社説の過半数（一〇八編中五九編）を非収録としていることが明らかになった以上、その信憑性など期待はできないと言すべきなのである。

(1) 「時事新報廃刊 隠居から死まで」について

本章は旧著『幹明伝』の第7章「晩年の幹明」に相当している。旧著に比べてとくに新しい情報が含まれているわけではない。ただ、幹武が幹明の実子ではなく甥であることを私が知った石河明夫編『手向けの花』（私家版・一九三五年）について触れている。前論考にも書いたように私はこの本を国会DCで知ったのだが、そのきっかけはウィキペディアの「石河幹明」の項目で、実子の名前が「幹武」から「明夫」に書き換えられているのに気づいたからだ。

私は『真実』の中で幹武には触れておらず、刊行翌年に受けたインタビュー記事で一回言及しているだけである。その記事をネット上で探し出した誰かがウィキに記載したことにより作者（明子）の目に留まったのである。作者が修正しなければ私も気づかなかったわけで、指摘自体はありがたいのだが、『真実』の記述とは無関係な事実である。

(2) 「幹明周辺の資料について」について

ここで再び作者は私による幹明の経歴調査が不十分であることを批判している。まず最初に『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館・二〇〇一年）の「石河幹明」の項を紹介している。会田倉吉によるその解説は目にした記憶があつて、前論考で「私も『真実』の原型『時局的思想家福澤諭吉の誕生―伝記作家石河幹明の策略』（『アジア独立論者』第Ⅱ部）を執筆していた平成三年（2001）から平成一五年にかけて幹明の事績をできる限り調べようとしたのだが、一般的な近代日本人名辞典の記述以上のことは分からなかった」（『時事新報社主』三八三頁）とあるのはその辞典であつたように思う。

この辞典の記述は、作者によれば「かんめい」という正しい読みではなく「みきあき」と間違っているうえ「大変短くまとめられてしまつて」いるそうだが、人物としての重要度からいって本文四五〇文字参考文献五点というのは妥当な線でないかと思う。

3、「第二部『水戸っぱの頑固』出版までの経緯とその後」への応答

(1) 幹明像が作者の認識と異なる理由

歴史的な人物の研究を進めるにあたって遺族に断りを入れなければならないと考えている（らしい）作者の思考様式は私にとって謎である。また、作者は幹明の経歴の調査にこだわっているのであるが、それがより精密化されたからといって私の立論の根拠が揺らぐことはない。『真実』で扱っているのはあくまで福澤の存命期に時事新報社内できつていたことなので、幹明が入社する前の水戸時代や諭吉が退いた後の捨次郎時代のことは考察の対象外なのである。

作者はあるいは、「関係していた誰もが幹明を信頼し立派な人間だと評価していたから、『続全集』の「時事新報」を編纂するにあたり私が描くような「不誠実」を働くはずがない」という考えのもとに抗議を行ったのかも知れない。しかし、作者が思い描いている幹明像の情報源は全て肉親である祖母里（幹明の妻）か、幹明のもとで働いたことがある元部下の証言によつて、身内が褒めるのは当然のことである。

幹明の同輩以上は、福澤を含めて、彼を積極的に評価する言葉を残していない。福澤自身の幹明を後継と見なすような言葉はないばかりか、門下の同輩以上が幹明に言及することも稀であった。これはあくまで印象で、稀であることを証明するのは難しいのだが、そのことを補強できる資料として次の二冊が挙げられる。

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

(2) 影の薄い社説記者としての幹明

一冊目は『伊藤欽亮論集』下巻(ダイヤモンド社・一九三〇年)の「伊藤先生人物観並逸話」で、門野幾之進・安場来喜・北川礼弼・堀田正由・山本達雄・菊池武徳・伊藤達三・堀井卯之助・井上角五郎・竹越与三郎・是枝雅彦・犬養毅・磯村豊太郎・石河幹明・生田定之・柳莊太郎・村上定・鎌田栄吉・池田成彬・林毅陸・山名次郎・武藤山治・石山賢吉の二三名が原稿を寄せている。このうち幹明ほか北川・菊池・堀井・井上・竹越・石河・柳・池田・山名が時事新報記者で、さらに鎌田・林・武藤・石山は後年外部から株主となる人々である。この全体で幹明に触れているのは柳だけで、複数いる社説記者の一人として名前が一回記されている。

二冊目は『福澤先生を語る—諸名士の直話』(岩波書店集・一九三四年)である。これはインタビュー集であるが、大隈重信・山本権兵衛・後藤新平・犬養毅・尾崎行雄・鎌田栄吉・箕浦勝人・北里柴三郎・森村市左衛門・荘田平五郎・阿部泰蔵・松山棟庵・朝吹英二・門野幾之進・加藤政之助・足立寛・井上角五郎・草郷清四郎・須田辰次郎・岡本貞然・福澤桃介・伊東茂右衛門・酒井良明・山名次郎・坂田実・三宅豹三・下村善右衛門・木暮武太夫の二八名が話をしていて、インタビューに答えている人々のうち井上・須田・岡本・山名・坂田・三宅は時事新報社で幹明と顔を合わせていたはずであるが、幹明に全く触れていない。その名は高橋による刊行されたばかりの『福澤論吉伝』を宣伝する序文で一回言及されているだけである。

伝記が刊行されるまでの幹明は先輩同輩にとって影が薄い存在だったようである。同窓生間でそうであったとして、外部の間はどう見ていたかという点、徳富蘇峰が福澤の後継者と見なしていたのは明らかに高橋義雄のほうだった(註11)。もとより捨次郎が社長に就任してから時事の主筆に幹明が就いていたことは誰でも知っている事ではあったが、それはただそれだけのことで、大正一年の退社まで福澤の言論を幹明が継いだなどという評価はなかったのである。あたかもそうであるかのような伝説を作ったのは、福澤本人と幹明の関係を実際には体験していない幹明の部下たちなのであった。

ここまでの説明で本章冒頭の作者にとって「親から聞かされてきたものとはあまりに違う幹明像」(七九頁)となってしまう理由についてははっきりしたことと思う。要するに作者が聞いていたのは家庭人としての幹明の姿に過ぎず、職務上の姿とはまた異なるということなのである。

4、別冊「平山洋氏の論文「石河幹明は福澤諭吉を『騙った』か―石河明子氏に答える」に対する訂正と疑問」への応答

(1) 「動機および題名に関する間違いと疑問」について

作者によれば『真実』において幹明の経歴がきちんと調査されていないことが『幹明伝』執筆の主たる動機だったという。インターネット時代よりも前の著作である『真実』の記述を補う著作として『幹明伝』に大きな価値があることは前論考にも書いた。それはよいのだが、現在なら調べられるということ、過去においてもそうであった、ということは全く別問題であることを作者には理解してもらいたいと思う。

(2) 「論文の内容の誤りと訂正」について

作者はここで前論考の誤りを六点挙げている。順に答えていきたい。

その1「血縁でなければ係累はわからないと言っている点」で作者は戸籍調査について子孫以外でも可能と述べているが、実際にそれは許されていないのである。また『日本紳士録』を調べれば子世代までは分かったはずと言いが、国会DCが稼働する前にどうすればそこに幹明とその子の記載があると知ることができるのであろうか。誰でも簡単に可能、というのは作者の幻想なのである。

その2「小冊子が本誌の一部だといっている点」で、私は『幹明伝』とその付録冊子「文春新書『福沢諭吉の真実』平山洋著における不審点」を一体のものとして捉えたのだが、作者はここで別物だと主張している。確かに『幹明伝』の第9章「悪人説への反論」で私の名前は挙げられていないが、飯田泰三法政大学教授（当時）の電子メールに由来する、いわゆる幹明悪人説を唱えているのは私だけで、他の研究者はまったく主張していない異端の説なのである。『幹明伝』の読者なら誰でも第9章は私のことを言っていると思うだろう。

さらに福澤研究の現状についても作者には誤解があるようだ。昭和版『続全集』とそれを引き継いだ現行版『全集』の社説採録に疑義を呈したのは井田進也の「福澤諭吉『時事新報』論説の真贋」（岩波書店『図書』・一九九六年六月）が最初で、そこ

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

では福澤全集に幹明始め弟子の執筆した社説が採録されているという事実が指摘されているだけである。以上の経過により『幹明伝』第9章と別冊付録は別という主張は成り立たないのである。

その3「全く別の話を混同している点」は符号が記された紙にまつわる話であるが整理して説明したい。『幹明伝』には、発作後の福澤のこととして、「たとえ震える手で書かれた○、×であろうと、家族や部下にとっては、病人からの大事な意思表示でしょうし、まして、このように諭吉は筆を持ち、文章を綴る事が出来ているのです」(五〇頁)と、また、『続全集』編纂時のこととして、「当時使った新聞の揃いが残っていて、誰かつけたのか、社説には、◎○×△と、印が付いているそうです」(一〇四頁)と符号に関する二つの記述がある。

私は後者の新聞に付けられた印と前者とは同じことを意味していると解釈して、それは幹明がつけたものと前論考で述べたが、作者は異なる事態を指していると理解しよう。私は福澤が残した肉筆資料全てを収めたマイクロフィルム版「福澤関係文書」(雄松室、一九八八〜九八年)を全部閲覧したので知っているのだが、発作後の福澤の意思を示す遺品は、有名な迎二十世紀の習字とその書き損じ、さらに二人の姉に送ったハガキ各一通だけで、○×といった符号が記されたものはない。だいたい意思表明だけなら首を縦横に振るだけでよいのだから、わざわざ紙に書く必要などはないのである。

その4「諭吉の病状について」で作者は私が認知症と失語症を混同している可能性を指摘しているが、そんなことはない。失語症になっても文字は書けるのであって、現に習字も肉筆のハガキも残っている。発作後の福澤におも社説立案の意欲が残っていたならば必ずメモで指示したはずで、それが一切ないとなるとそもそも立案していなかった可能性が高いのである。

その5「交詢社評議員(ママ)はただの名譽職でしょうか」で、作者は私が「時事新報と慶應義塾以外の幹明の肩書きを、すべてただの名譽職であると切りすて」(付録冊子一六頁)いることを問題視している。交詢社常議員とは運営委員のことで、ある意味紳士の代表とみなされるので名譽なことではあるが無給である。名譽職ではない報酬のともなう仕事としては千代田生命取締役(役)がある。だから前論考では「すべて」ではなく「ほぼ」としているのである。

その6「石河明善についての誤り」で、作者は幹明の叔父明善の経歴の間違いを問題視している。私の明善に関する情報源は吉田俊純筑波女子大教授(当時)で、そのことは前論考にも明記してある。彼には『水府系纂』の閲覧をお願いしたのであるが、そこに明善の没年が明治元年(1868)とあったため『真実』でもそれを採用したのである。ただ、明善の没年を明治元年とするのは広く一般化しているらしく、『近世漢学者伝記著作大事典』(井田書店・一九四三年)でもそのようになっている。『真実』の準備段階ではその没年が正しいとされていたのである。

なお、「里が関恕の娘で関鉄之助の姪だというのは、一般には知られていないので、それこそインターネットには載っておりません。水戸で先祖の系図を調べて確認を取り、『水戸っぼの頑固』で発表したことでしたが、『日本紳士録』を読んでいない氏はどちらで調べられていたのでしょうか（付録冊子一七頁）とあるが、里が関恕の娘であることは明治三二年（1899）一月六日付福澤諭吉石河幹明宛書簡（結婚祝賀）に付せられた註に記載されている。関鉄之助の弟恕の名前は吉村昭著『桜田門外ノ変』（新潮社・一九九五年）で記憶していたので両者が結びついたのである（拙著『福澤諭吉』（二〇〇八年）三五三頁）。

(3) 「文藝春秋からの返答が不審である点」について

作者は自分から文春社に送られた手紙を私が見ていると考えているらしいが、実際に読んでいない。あくまでも遺族と出版社の問題であるからである。新書版オビの宣伝文に私が関与していないことは前論考にも書いた通りである。『真実』の内容は、幹明が『続全集』編纂にあたり自分で書いた社説を大量に採録したため、福澤の思想が真実とはかけ離れて理解されている、というものであって、それ以上でも以下でもないのである。

5、「騙り部」とはどういうことか

(1) 経歴の調査では幹明の内面は分からない

作者のもつ先入観として、『続全集』の社説採録への疑義が戦後になって言われ始めたと考えていることがある。すなわち、「戦後になってから、『続福澤全集』編集に誤りがある事と、幹明の主義主張が問題となり、様々に論ぜられて来ましたが、肝心の石河幹明自身については、平山氏の記述にもあるように、何も調べられていないのです」（八五頁）とあるのだが、実際に『続全集』の研究史を調べてみると、社説ではない「丸屋商社之記」（一八六九年）の作者が福澤ではなく丸善の主だったのではないか、という問題提起が一つだけ発見できた（註12）。ところがこと社説についてはどの研究でも福澤が書いたかまたは福澤が発案したものとされてきていて、その選択に疑問が呈されたことはない。先にも触れたように「幹明の主義主張」について社説採録の問題として提示したのは『真実』が最初であった。

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

実際のところ『真実』の刊行時まで、忘れられた新聞人だった幹明の経歴はほとんど知られていなかった。作者の努力により時事新報社と慶應義塾の外での活動が明らかになったものの、結局彼の内面を探るための素材はほとんど得られていない。幹明は日記を書かなかったし、書簡も残っていない。彼が何を考えていたかを知ることができる材料は結局彼が書いた社説しかないのである。

(2) 福澤起筆社説と幹明起筆社説は区別が可能である

作者は前節の引用のすぐ後に、(幹明について)「調べていないにもかかわらず、幹明の人格や感情が勝手に「推測」され、本人とは全く異なった人物像が造られてしまっているのです」(八五頁)書いている。幹明本人とは異なる人物像とは、私が『真実』、『福澤諭吉』(ミネルヴァ書房・二〇〇八年)、『アジア独立論者』(ミネルヴァ書房・二〇一二年)、『「福澤諭吉」とは誰か』(ミネルヴァ書房・二〇一七年)、『時事新報社主』(法律文化社・二〇一二年)を通して明らかにした人物像のことであろうが、それは社説の分析を通して再構築されたものである。だから作者が社説の起筆者認定問題を避けてしまうと私が証拠として提示している事態から目を背けてしまう結果となるのである。

幹明の内面を示す文章はごく少数の例外を除けば明治一八年(1885)四月から大正一一年(1922)四月までの丸三七年間に彼が書いた社説だけである。明治三一年(1898)九月に福澤が脳卒中の発作に倒れる前までは、福澤が起案した社説もあるだろうし、福澤とは無関係に幹明が自らの考えを述べた社説もあるであろう。編集部に所属している内部の人間が自らの意見を述べる場合はイニシャルを用いることになっていて、幹明の場合は碩果生(せきかせい)である。この碩果生名で書かれた文章で福澤全集に掲載されているのは明治三四年(1901)一月二五日掲載の「瘦我慢の説に対する評論に就て」のみである。

では幹明が考えていたことを諭吉の考えと区別して示すことは可能なのか。私は井田メソッドによれば百パーセント福澤の社説と百パーセント幹明起筆のその区別ならつづけることが可能だと思ふ。社説記者が起筆して福澤が手を入れた社説が多数存在するため、それらをどうするのかという問題が生じるのだが、さすがに純粹のものは見分けられる。とくに福澤の晩年(捨次郎社長就任以降か?)については先に見た『続全集』の「付記」にもあるように幹明自身が起筆した社説である可能性が高い。

そこで幹明の文体の特徴だが、まず福澤に比べて一文が非常に長いため明晰さに欠ける印象がある。また、波多野承五郎や渡辺治ほどではないにせよ難しい漢字を使うことが多い。幹明が多用する「猖獗」という言葉を福澤が用いたことはないようであ

るが、それは「盛ん」で同じ意味が伝えられるからである。他に石河語彙として「鑿」（みなごろし）「万世一系」「不俱戴天」を指摘することができる（『時事新報社主』七三頁）送りがないのは福澤が「分て」「挙て」「為て」「殆ど」とするのにたいし「分れて」「挙げて」「為りて」「殆んど」と多めにふるようである。そのため現行「時事新報論集」において幹明起筆の論説が続いた後に稀に福澤が執筆したものが載せられていると一目で区別できる。

昭和版『続全集』の末尾には、幹明自身が書いた「大逆事件」関連の論説が一〇編収められている。福澤の全集に没後一〇年も経過した、しかも福澤の思想とは何の関係もない論説を収録した幹明の神経を疑うが、幹明が確実に書いた論説のサンプルとしては役に立つものである。

繰り返すが私が「石河が福澤を騙っ」たと書いたのは、幹明が自分で書いた社説を何の断りもなく『続福澤全集』に収録したことによる。幹明が福澤の代筆である旨の注記をした社説は大正版に一四編、昭和版に七七編ある。しかし問題は、それ以外にも多数の、おそらくは数百編にもおよぶ幹明起筆社説が昭和版には収められているのに、そこに何の断りもないため、結果として福澤の社説として流通してしまっていることである。こうした事態を「騙り」という以外の表現であらわすのは難しい。

たとえば福澤本人が書いたのではないとしても、幹明執筆の社説が福澤と同じ立場であるなら許されるのではないか、という意見もあり得るかもしれない。ところが、福澤が確実に関与した証拠がある社説とそれ以外（その多くは幹明執筆と推定）とを比較した場合、そこには明確な立場の差が見られるのである。それを明かすのが安川寿之輔著『福沢諭吉のアジア認識』（高文研・二〇〇〇年）の巻末の一覧表を用いて「安川が問題ありとする論説を、大正版『全集』に収録されているものと昭和版『続全集』に入っているものに区別して比較する」（『アジア独立論者』二一三頁）という方法で、結果はアジア蔑視表現の出現率について大正版『全集』が一・八%であるのに対して昭和版『続全集』は五・〇%と、約三倍の頻度になっている。また、大正版に収録されている時事新報社説由来の単行本にも安川から蔑視を指摘された用例はない。こうした差は、大正版の主たる起筆者が福澤であるのに、昭和版が幹明であることに起因するとみなすしかない。第二次世界大戦後から現在まで連綿として続く左翼陣営の福澤批判は主として昭和版『続全集』所収社説を根拠にして唱えられているのであるが、それは幹明が福澤を騙ったことによる風評被害といってよいのである。

(3) 福澤筆「植民地の経略は無用なり」の三日後に掲載された幹明筆「台湾の騒動」

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

福澤の次男捨次郎が時事新報社長に就任したのは明治二十九年（1896）一月のこととされる（他に七月説もある）。『真実』（四五頁）にも書いたように、ほぼ同時に総編集だった伊藤欽亮が退社したことから、その後には捨次郎と伊藤との間の社長職を巡っての暗闘があったものと思われる。八年前の明治二十一年一〇月には幹明は渡辺と組んで伊藤排除を企てたのだから、今回も捨次郎の擁立を図ったのは間違いでない。一太郎捨次郎の福澤兄弟はクーデタ騒動の直後に留学から帰国して一介の記者となっていた。その二人のうち素質のあった捨次郎を幹明は自派閥に引き込んだのである。その関係も二六年後には決定的に破裂するわけであるが、少なくとも最初はそうであったはずである。

社長就任が一月であったとするなら、それに伴っての論調の変化というものは見られないのかといえ、それははっきりとある。詳しくは『時事新報社主』の第八章「移民論」に書いたことだが、それまで日本の人口増加に対応するために海外移民を奨励していた『時事新報』が、この時期を境に突如海外での領土拡大を志向するようになって、台湾で蜂起した住民を鑿（みなごろし）にしてその土地を日本化するべきだ、という主張をなすようになったのである。その論調が変化する直前の明治二十九年（1896）一月五日に全集非収録の社説「植民地の経略は無用なり」が掲載されている。

大陸嶋嶼の如何に拘はらず、日本人の移植に適當して然かも収めて所領と爲すに差支なき土地あらんには遠慮會釋は無用なれども、扱實際に他に邦土を略するは、無人の地を収ると異にして容易ならざるのみならず、好しや之を略したる處にていよいよ自國の所領として其實を全ふせんとするには、多數の官吏を置いて政令を行ひ、海陸の固めを嚴にして内外に備ふる等その費用は容易ならず。經濟上割に合はざる談にして智者の事に非ざるなり。日清戰爭の結果として、臺灣の割讓は國防上の必要に出でたるものなれども、彼の遼東半嶋の如きは我に収めて經濟上の得失、果して如何ある可きや。支那政府の無力なる、正當に負擔す可き戰敗の報償を出すこと能はざるより、止むを得ず半嶋を割かしたるまでのことにして、實際の始末は頗る難儀に相違なければ、外國の忠告に由て還附したるは寧ろ偶然の仕合なりしやも知る可らず。左れば日本人は決して土地の併吞を望むものに非ず。否な望まざるに非ざれども、實際に得失の償はざるを知りて、斯る非望を起さざるものなり。（『時事新報社主』一五一頁）

ここにはっきり示されているように、海外に新領土を求めるのは経済的観点から合理性を欠いているので、やめた方がよいというのである。全集には収録されていないこの「植民地の経略は無用なり」は間違いなく福澤起筆の社説である。英国の経済学者ウエイクフィールドの影響下にあった福澤は、移民を歓迎している国に余剰人口を移住させたいうえでその国と交易をした方がずっと有効だ、とも述べている。この社説に呼応して発表されたのか、全集に収録されている「台湾の騒動」が掲載されたのは

その三日後の明治二十九年一月八日のことである。

我輩は曾て台湾討平の際に意見を陳じて、苟も我に反抗する島民等は一人も残らず殲滅して醜類を尽し、土地の如きも容捨なく官没して全島掃蕩の功を期せざる可らずとて再三勸告を試みたれども、一時の平定を以て真実の平定と認めたるにや、出征軍の大部分は直に凱旋して、単に守備兵のみを留め、島内の警察は憲兵巡査に一任して、扱施政の方針は如何と云ふに、全島を文明界、半開界、野蛮界の三区に分ち、文明界には民政組織を執行し、諸規則法律等、一切形の如く施す可しなどの説さへもある其文明界とは則ち重に今回草賊の巢窟たる地方にして、蓋し当局者の考にては兵乱全く鎮定したる上は純然たる文明の政法を以て島民を治むるの方針なりしが如くなれども、彼等の頑冥不靈は最初より知れ切たる事にして到底恩を以て懐かしむ可き輩に非ず。或は其中には従順の良民も少なからざることならんれども、要するに全島を蛮民の巢窟として認め、威を以て之に臨むの外ある可らず。(現行版『全集』第一五卷三五五頁)

こちらでは「我に反抗する島民等は一人も残らず殲滅して醜類を尽し、土地の如きも容捨なく官没」し、「全島を蛮民の巢窟として認め、威を以て之に臨むの外ある可らず」というのであるが、これが幹明の言葉であるのははっきりしている。この立場は以後揺らぐことはなく、約七カ月後の明治二十九年七月二十九日掲載の「先づ大方針を定む可し」では、台湾割譲の目的は内地人の移民であって、そこにもともと住んでいた人々を考慮に入れるべきではない、という主張が展開されている。

割譲の目的は全く其土地にして、人民に非ざること最初よりして既に明白なれば、島地の始末に就て当局者の見る所は只その土地あるのみにして、彼の島民の如きは断じて眼中に置く可らず。実際には台湾と名くる一の無人島を手に入れたるものと覚悟して、経営の大方針を定む可きものなり。即ち此方針より事を断ずるときは、百般の問題、刃を迎て解く可し。甚だ容易にして毫も困難の始末はある可らず。只我が思ふ存分を断行して土地を収むるを以て目的と為す可きのみ。若しも彼の島民の輩が我政令に心服して真実順民の実を表するときは、仮令ひ好ましからざる輩とは云へ、嚴重に処分するが如き、実際には能はざる所なれども、彼等は単に心の底より帰服せざるのみか、動もすれば相率るて反抗を試み、我官吏人民を殺戮するが如き頑冥不逞の徒にして、今に騒動の跡を絶たざる次第なれば、寧ろ度々の騒動を好機会として、罪状の明白するものを嚴罰に処するは申す迄もなく、苟も事を幫助し又は掩蔽したる疑あるものは容捨なく境外に放逐して、其土地財産の如き悉皆没収して官有に帰せしむ可きものなり。(現行版『全集』第一五卷四七三頁)

この、土地だけが重要で住民は度外視するべきだ、と主張する「先づ大方針を定む可し」も「台湾の騒動」と同じく石河起筆と推定できる社説である。

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

明治二八年暮れまでの移民論は明治版『全集』収録の諸論説も含めてすべて「植民地の経略は無用なり」と同じ立場であった。それが翌明治二九年一月に論調はがらりと変わっているわけである。『続全集』「付記」にある幹明の言葉を感じるならば、全集非収録の「植民地の経略は無用なり」は福澤作ではなく、収録済の「台湾の騒動」と「先づ大方針を定む可し」は福澤立案幹明起筆の社説となるのであるが、そのようなことがあり得るはずもない。要するに、捨次郎の社長就任を境に幹明は福澤論吉の意見など聞く耳をもたなくなった、ということなのである。

おわりに

幹明は自ら書いた「台湾の騒動」と「先づ大方針を定む可し」を『続全集』に採録し、福澤による「植民地の経略は無用なり」を収録しなかった。捨次郎の社長就任の頃までにはこのように立場の差は歴然としていたわけだが、そうだとすると『真実』刊行以来私に寄せられてきた、なぜ福澤は意見の異なる幹明を放逐しなかったのか、という疑問は残ってしまふことになる。入社した明治一八年(1885)から時事新報社が株式会社化する大正九年(1920)までの三五年間、幹明は福澤家を出資者とする合資会社のただの使用人にすぎなかった。論吉も捨次郎も幹明を誅首しようと思えばできたはずではある。永らくのこの疑問に關し答えることができるようになったのは今回の調査での収穫である。

ここまで述べてきたように、幹明は論吉指導時代にもその後の捨次郎社長時代にも、徳富蘇峰を始めとする『時事新報』外の人々から評価を受けたことはなかった。幹明を賛美するのは妻の里を除けば、福澤一太郎・板倉卓造・成瀬義春・伊藤正徳・富田正文といった人事上の恩義を受けた人々に限られる。戦前戦後を通じて『福澤論吉伝』と『続全集』の強力な庇護者となった小泉信三は例外かとも思われるが、同期の親友であった成瀬との関係から、例えば在学時代から編集部でアルバイトをしていたのではないか、という想像も働く。ともかく幹明は後輩の面倒見がめっぽうよいのである。

思うに幹明が後輩に親切にしたのは『時事新報』の発展のためばかりではなく、編集部内に自派閥を作ることを目的にしていたのである。明治二年(1888)に最初の危機が訪れたが結果は幹明の勝利だった。その時彼は他の二人と図って一斉退社をほのめかしたのだが、論説担当がいなくなる事態を恐れた論吉の方が折れたのだった。三四年後の大正十一年(1922)に同じ恫喝を受けた捨次郎は幹明の思惑に反して慶應閥の一派を選んだが、それは論吉時代と違って編集部が拡大していたためである。

知られているのはこの二回だけとはいえ、長い主筆在職期間に同様の事態が無かったとは言い切れまい。自分が思い描く言論に上からの懸念が示されたときには同様の恫喝に幹明は躊躇しなかったのではなからうか。しかも捨次郎時代に入ってからは亡き諭吉の衣も借りたわけで、先に引用した宋公明言うところの「大久保彦左的態度」（『日本及日本人』大正一三年一〇月一日号）とはそのことであろう。

しかも問題なのは幹明が何かと引き合いに出す「福澤先生」とは、じつは幹明本人だったということである。『福澤諭吉伝』で『時事新報』社説が引用される場合に、それが大正版『全集』の「時事論集」に由来している場合は、「福澤先生は」とおっしゃった」という形式で、また昭和版『続全集』所収分に由来している場合は「『時事新報』は」と伝えた」という形式で紹介されることはすでに指摘している（『アジア独立論者』二二二、二二三頁）。注意するべきは福澤執筆の社説をいくつも『続全集』に採録していないにもかかわらず、大正版『全集』に石河起筆とある社説までもが『福澤諭吉伝』には敬語付きで引かれていることである。そればかりではない。幹明起筆と推測できる『続全集』所収の「日清の戦争は文野の戦争なり」（明治二七年七月二九日付）でさえも、まるで福澤の社説であるかのように敬語付きで紹介されている。

ここまで来れば私が何を言いたいかは明らかであろう。要するに『福澤諭吉伝』とその短縮版である『福澤諭吉』を除いて著作を残さなかった幹明は、伝記とその素材となった自分で書いた社説を通して、「福澤先生とは自分のことだ」と主張し続けたということなのである。こうしたあり方こそが「騙り部」としての石河幹明の真骨頂と言うべきである。

作者は新著『祖父幹明』の「おわりに」において、「石河幹明は誠実な仕事をしたのか、と問う平山氏は、石河幹明に対して誠実な仕事をしているのでしょうか」（八八頁）と問いかけている。私はこの二〇年間幹明の内面を知るべく『時事新報』を精密に調査し、幹明が書いた社説をより分けて読んできた者である。『アジア独立論者』『福沢諭吉』とは誰か『時事新報社主』の三冊により、『真実』では十分に展開されなかった論証は尽くされている。作者がそれらの本を読んで正しく理解するならば、私の誠実さを信じ、また私の結論を受け入れることになると思う。（本文終）

注記…本文中の旧漢字は原則として新漢字に改めた。敬称は省略した。

註

(1) 作者に直接の謝辞を贈れない理由は、連絡先を知らされていないためである。

「騙り部」としての石河幹明—再度石河明子氏に答える

- (2) 生没一八七九—一九六三、慶應義塾大学法学部教授・時事新報社長・貴族院勅選議員。
- (3) 生没一八八八?—一九三一、時事新報経済部長・慶應義塾大学経済学部教授。
- (4) 生没一八八九—一九六二、時事新報社説部長・時事新報社長。
- (5) 生没一八六七—一九三四、鐘紡社長・衆議院議員・時事新報相談役。
- (6) 生没一八六七—一九五〇、時事新報記者・三井合名理事・日本銀行総裁・大蔵大臣・商工大臣・枢密顧問官。
- (7) 生没一八六九—一九六〇、松江日報記者・王子製紙社長・商工大臣・軍需大臣。
- (8) 生没一八六一—一九二四、日華紡績社長・第一生命相談役・貴族院勅選議員。
- (9) 生没一八八八—一九六六、慶應義塾大学経済学部教授・慶應義塾長。
- (10) 生没一八九八—一九九三、慶應義塾職員・慶應通信(現慶大出版会)社長・福澤諭吉協会理事長。
- (11) 蘇峰は戦時中の『言論報国』(一九四四年三月)誌上で福澤批判を行ったが、その時弟子の代表として挙げられたのは名指しされてはいないものの明らかに高橋だった(『時事新報社主』三七四、三七五頁)。
- (12) 丸善株式会社編『丸善社史』(丸善・一九五一年)六頁。